

働き方会社と一緒に検討を

いろいろな見え方を通じて 視覚障害の当事者から⑨

視覚障害者の就労は他の障害者の雇用に比べて難しいのではないかと感じています。通勤が困難な方も多く、職場でも業務内容によっては読み上げの補助など必要とする場合があります。

私は医療機器メーカーで営業の仕事をしていますが、網膜色素変性症が進行して見える範囲がだんだん狭くなり、2020年11月に車の運転ができなくなりました。仕事に支障を来すことも想定されるため、その時、退職や転職を含めていろいろと将来のことを考えました。

覚悟を決めて会社に伝えたところ、「公共交通機関を利用できるのであれば仕事を続けてほしい」と言われました。理解のある職場に恵まれたことは大変ありがたかったです。仕事でも営業先の病院まで車に乗せてもらったり、必要書類を代筆してもらったりと、いろいろなサポートを同僚にしてもらっています。

営業先の医師には、仕事で迷惑をかけるといけないので先に病気のことを伝えていました。先日、営業で訪れた病院の放射線科の医師から「見え方はどうなの」と聞かれました。白杖はくじょうを使い始めたことや、中心以外の見える部分が小さくなっていることを伝えると、視覚障害について知らないことも多いのもっと当事者の情報を教えてほしいと言われました。営業マンとしてではなく、一人の人間として見てくれていたことを大変うれしく思いました。

以前と比べれば、効率も悪く、訪問件数も減りましたが見てくれている人は見てくれているということだと思います。これからもビジネス上の付き合いだけでなく、人との付き合いを大事にして仕事に取り組みたいと思います。そのような人間関係が広がるのも仕事の魅力の一つです。

社会人になってから視覚障害になった人（中途視覚障害者）もすぐ会社を辞めるのではなく、その職場で職種や仕方を変えたら仕事を続けられないか、会社と一緒に検討してもらえたらと考えます。最近は障害者雇用を積極的に進める企業も増えています。企業側も人となりが分かっている従業員なら継続して雇用しやすいのではないかと思います。

（山元正史、大分県網膜色素変性症協会員）＝随時掲載＝



山元さんのホームページのQRコード